

井形慶子著「古くて豊かなイギリスの家、便利で貧しい日本の家」

新潮文庫 2004年6月1日刊を読む

イギリスで考えること

1. (1)日本の街中から消えてしまった古い木造家屋の中には、そんな貴重な暮らしのエッセンスが保存されているはずだった。東京の下町、根津や谷中<sup>やなか</sup>を歩くと、築年数のたった貴重な昭和初期の住宅が残っている。私たちはその窓や玄関の前に立つと、中が一体どうなっているのかのぞいてみたい衝動にかられる。  
  
(2)これこそは、イギリスの古い家の窓辺にたたずむ感覚と同じなのだ。そこにはかつての貧しくとも人間的で工夫に満ちた日本の生活が残っているような気がする。それを確かめ、それに一瞬でも触れたいと思うのだ。それこそが日本人が伝承してきた暮らしの中の知恵であり、感動だから。  
そんな場所を訪れるたび、日本もいいな、捨てたもんじゃないな、と思う。  
  
(3)ところが、いったんそこを離れてしまうと、同じような感動に再び遭遇することは難しい。なぜなら日本人は過去の暮らしが投影された古い建物をどんどん取り壊し、新しいビルに建て替えてしまったからだ。それが日本の大きな損失と気づかないまま。
2. (1)一方、イギリスのパブで暖炉の前に腰かけてラガーを飲む時、フツと顔を上げると、重厚なバーカウンターの周囲に精密な模様が彫られていることに気づく。精密なその木工細工はかつての職人技が生きてリッチで歴史的なテイストにあふれている。そんな空間でわずか400円程度のラガーを飲んでいる自分は何と幸福だろうと満たされていく。  
  
(2)そしてこの感動は続く。パブを出て、街中を歩いても、ホテルに戻っても、イギリスでは何かがずっと続いている。日本のように区間限定ではないのだ。  
  
(3)雨風にさらされた公園のベンチには故人の遺志が含まれ、改装されずクラシカルな雰囲気を残したままの駅のドームは、あちこちが傷<sup>いた</sup>んでいても子供の頃映画で見たスタイルとまったく同じだ。  
  
(4)表通りから一本裏に入っただけで広がるレンガ造りのタウンハウス。クレセント(三

日月型)にデザインされた玄関ポーチ。手のかかりそうな美しいあのフォルムは、かつてイギリス人がこよなく愛したスタイルだった。それを人々は受け継ぎ、誰も手を加えようとはしない。

(5)パブで見つけた感動は、イギリスの津々浦々まで歩き回っても同じレベルでつながっている。都会でも僻地<sup>へきち</sup>でも古都でも統一された景観や街並みの中に脈々とつながる一本の価値観が見える。それがイギリスらしさであり、あの国がかもし出す個性なのだ。それを日本人は肯定し、暮らしの中にとり入れようとする。

「ああ、人間の暮らしは本来こうあるべきだったんだ」

私たちはイギリスを訪ね、イギリス人の暮らしに触れるたびにそう心の中で繰り返しつつやくはずだ。

3.(1)いくらイングリッシュガーデンを作っても、今の日本でここまで出来上がった消費文化を壊し、かつてのスタイルを再びとりもどすことはもう不可能かもしれない。

(2)けれども、そんな現実とは裏腹に、買って捨ててまた買い続けるこの消費文化を抜け出し、日本人は新しい生き方を始めたいと、始めなくてはと思っている。

(3)だからこそ私たちは過渡期である今、イギリスを訪れ、あの国の中に息づく生活に触れながら、どこかで崩れそうになっている暮らしのバランスを保ち続けようと試みるのだ。

(4)来るべき<sup>きた</sup>高齢化社会に向けて、個人の暮らしはますます重要になってくる。会社から家庭へ視点を移した時、そこに得られるものが何もなかったなら、私たちは人生の半分を空しく生きていくことになる。家とは個人の暮らしが集約される舞台だ。高齢者が一人で厳しく孤独と共存しながらも最後まで人間らしく生きるイギリス。

(5)そんなイギリスの家こそは日本人が今、もっとも触れたい、のぞきたい、知りたいオリジナルな考えが詰まっている場所だと確信する。このびっくり箱を開けずして人生を通り過ぎていくことはあまりにももったいない。本書の中からそのエッセンスのいくつかが読者の方々に伝われば幸いである。

P270 ~ 273

#### [コメント]

大不況下の日本や世界でどのように「質の高い生活」を考えたらよいのか。井形氏のこの著作から、そのためのヒントを数多く学ぶことができる。

- 2009年3月27日林明夫記 -